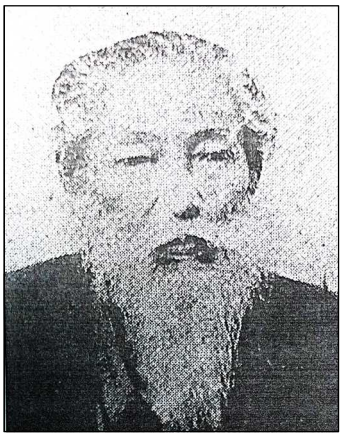
長野県における国会開設運動の真の指導者

武居　用拙（たけい　ようせつ）（活躍した時代）1816～1892　（出身地）：木曽福島町

本名：武居　彪。幼名を花之助。通称は拙蔵。字は文甫。用拙と号したのは 40 歳になってからで，杜甫の詩の「用拙存吾道」の精神に感動したことによるもの。



	江戸				明治						
西暦	一八一六	一八三六	一八四二	一八六七	一八六九	一八七二	一八七三	一八七五	一八八〇	一八八六	一八九二
出来事	一月　木曽福島町に生まれる。	江戸に出て、古賀侗庵に従い、昌平校で学ぶ。	木曽福島に帰郷。郷学の菁莪館の助教となり教育にあたる。	菁莪館の学頭になる。	明治維新で、菁莪館廃絶する。	東筑新村で、作新学校長に就く。	塩尻洗馬の克己学校に就く。	豊科成新学校に招かれる。変則課で指導する。	奨匡社発足。長野県国会開設運動を指導する。	上京。島崎藤村に「詩経」を指導する。	郷里木曽で三月に亡くなる。

◎長野県の国会開設運動の発祥地　安曇野市豊科法蔵寺

1875 年，藤森寿平に招かれ，豊科の成新学校(法蔵寺内)の変則課で青年たちの指導にあたる。塾を利用して正則の小学校ではできない教育活動を展開。専門の漢学を生かし，文章軌範，漢文，作文，数学を教え日本政記，日本外史，皇朝史略，四書などを教材として取り上げた。『官吏は人民のために存在し，人民の幸福を第一とすべきである。官吏にしてその念慮なくんば単に禄を虫食む徒たるのみ』等の政治教育をし，次世代を担う若者を指導した。

豊科　法蔵寺

法蔵寺内　成新学校跡

用拙から指導を受けた人物
- 松沢　求策：国会開設運動，自由民権運動家
- 降旗元太郎：松本における普通選挙期成運動を主導
- 今井　五介：片倉組経営者，大糸線開業に尽力
- 堀内千万蔵：塩尻村長(現塩尻市)を経験

三郷　貞享義烈碑

貞享騒動での中心人物，多田加助にスポットを当て，松本藩の法を犯した罪人ではなく，民権の宗（先駆者）とした見方から研究を行った。用拙が指導し，松沢求策が「民権鑑嘉助面影」という芝居をつくり，県下各地で上演をし，民権思想の普及に貢献した。求策は後に国会開設運動を行っていく。また，加助二百年祭では，藤森寿平が手配をして，用拙に顕彰の碑文を書かせている。

◎国会の開設を求める自由民権運動の結社「奨匡社」の名付け親

用拙は，奨匡社の発会式で創立事務委員の一人に選ばれ，奨匡社大会でも常備委員にも選ばれている。「奨匡雑誌」に載せた命名由来の説明によると，用拙が「孝経」から命名し，**「よい政治はこれを奨め，悪い政治はこれを匡していく」**という意味。“よい政治とは中国古代の尭・舜の時代の王道政治を指し，「天下は天下の天下である」”という考え。そして，用拙が指導し，国会開設請願書を作成し，これと県下二万余名の署名とを携えて，松沢らは天皇に直接請願して国会を開かせようとする。元老院に建白書を提出する場合，意見は聞くが政府が何ら回答する必要がない。請願書でないと政府の施策の転換を迫れないと考え，請願を主張していく。

◎島崎藤村にも影響

1886 年に松沢求策の招きで上京すると，身を寄せていた吉村忠道のところに寄宿していた 14 歳の島崎藤村に「詩経」「春秋左氏伝」を教授した。その後，藤村の書いた「夜明け前」には「拙蔵」の名で登場している。

【参考文献】
「鋤鍬の民権　松沢求策の生涯」中島博昭／著　銀河書房　1974
「東筑摩　松本市　誌　別篇人名」
「脚光　歴史を彩った郷土の人々　武居用拙」小松芳郎　市民タイムス　平成 24 年 10 月 14 日号
「安曇野文芸　高遠の道」中島博昭
「自由と民権のさきがけ　松沢求策ものがたり」松沢求策顕会　信濃毎日新聞社　2001